
その勇者、虚ろにつき

パイルバンカー串田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その勇者、虚ろにつき

【Nコード】

N7248Z

【作者名】

パイルバンカー串田

【あらすじ】

魔王により危機に瀕した異世界で、一人の男が勇者として召喚される。

だが召喚した王は勇者を捨て駒として利用していた。そして男は、勇者として決意の元に行動を開始する。

召喚（前書き）

ぬるくない反逆系勇者を書いてみたらこうなった。なぜだ。

召喚

「主文、被告××××は……」

音が聞こえる。

「判決……」

特に理解した所で、意味の無い、音だ。

「……刑」

こんなものに、意味は無い。

「……死……」

僕にも、意味は無い。

「……ここは、どこなんだ」

気がつけば、男は奇妙な部屋の中にいた。

今どき珍しい石造りの壁や床、やや不純物が入りこむガラス窓。

そして、床に描かれているのは今まで見たことのない種類の文字と幾何学紋様の羅列。円を基軸としたその配置は、ドラマや漫画で

見たいわゆる「魔法陣」を彷彿とさせる。

「……君、たちは」

周囲には、屈強な男達。だが纏うのは洋服ではなく中世西洋の全身甲冑だ。

目の前には、やや低めの背丈の肥満体の中年がいた。

巻き毛の金髪に頂くは豪華な王冠、盛大に生える髭、太い指にはめられる、菱形の輝く指輪、堂々とした態度と気風はその男が幼少より人を下として扱うものとして育てられた事を示す。

現代日本で育った彼でも、その王冠の男がおよそ「王」であることは予感できた。

「よくぞこの世界に参られたッ！ 我らが勇者よッ！」

高らかに、王らしき男は叫んだ。

彼は、無表情にそれを見ていた。

「——故に、あなたは勇者なのだ」

広大な大広間、巨大なテーブルで王が喋る。並べられるは、何か種類はわからぬが贅を尽くしたとわかる無数の料理と酒、豪華な燭台。子豚らしき丸焼き、大魚のパイ包み、とにかく手がかかりそうな料理の数々。

王らしき男は、やはり王だった。

最初にいた部屋から通された広間で、彼の質問などする暇もなく事の経緯を話し始めた。

王いわく、この世界は魔王という存在に侵略されているという。
魔王は手強く、現在の戦力では勝てる見込みがない。それゆえに
古来より王族に伝わる「勇者召喚」の魔術により他の世界から人間
を呼び寄せ、魔王と戦わせることにしたのだ。

勇者召喚の魔術で召喚された他世界の勇者は、魔術によって強化
され最強の兵士となる。この力を持って魔王を討つのだ。

長々と弁舌を唱え、王は喉の渇きを葡萄酒で潤す。二、三度の咳
払いの後、さらに喋り出した。

「さあ、勇者よ、どうか我らの願いを聞き、正しき勇者の力を示し
てはくれぬか！」

魔術、召喚、フィクションの世界だけの言葉に、彼も少々面食ら
った。だが今、目の前の現実のみが全てだ。少なくとも今の彼を騙
して得をする者など一人もない。

ここが異世界であろうと、結局の所、彼は彼のやり方をしていく
しかない。

「どんな方がくるか正直不安でしたけれど、勇者様は意外と優しそ
うなお顔をしているんですね」

鈴の音のような声が、王の傍らの席から響く。

年は十七、八ほど。折れそう程に華奢な腰が、細い肩と首筋へ連
なる。纏うは絹のドレス、裾が大きく広がり、下半身を隠す。輝く
ティアラをつけられた長い金髪、ガラス細工のように整った容貌。
人の美醜に疎い彼でも、少女が美人だと思った。この王の娘、つ
まり姫だという。

「魔王に打ち勝つ人というから、どんな恐ろしい方かと思いました」

けれど、安心いたしました」

少女の笑顔は、まるで花が咲くように輝いていた。

「……王よ、僕は何をすればいいのですか。勇者とは、何を成す存在となればいいのでしょうか？」

覚悟と決意をこめて彼は問う。ここからの王の言葉が、彼のここからの全てを決めるのだ。

「おお、勇者の業を引き受けてくれるのか！ 勇者として成すこととはまず魔王の討伐」

肥満体を揺すり、王が語る。彼はじつとその声を聞いていた。

「我ら王家に忠誠を近い、民の希望と明日を護るため戦う、それが勇者だ。……もちろんゆくゆくは、君も王族の一人として加わる道も考えている……姫の婿としてな。その時は大切にしてくれたまえよ？」

横を向く王の視線、頬を赤らめる姫。

「……それが、勇者として成す全てですか？」

今の内に、全てをしつかりと聞いておかねばならない。

「ああ、これが全てだとも！ では早速魔王討伐のための支度を……」

「空は」

王の声を遮る。これが最後の質問だ。

「この世界の空は、青いのでしょうか？」

「ん、……ああ、空が見たいのか、勇者殿よ。さあ姫よ、彼を中庭へ案内してあげなさい」

王にうながされ、少女が立ち上がる。立つと細い体がより細く見えた。白魚のような長く白い、美しい指先が彼へ伸びる。

「さあ、こちらへ勇者様。今日はとても晴れた空なのですよ」

「……そう、なのですか」

勇者はゆっくりと、立ち上がった。

——まさか本当にやるとは……！

戦士長、オウタは駿馬を走らせる。

追従する馬は部下十二名。

林の街道を抜け、ただひたすらに王城を目指していた。

——勇者召喚、そんなことが……

魔王軍とは現在膠着状態にある。まともにぶつかれば魔王軍が優

位だが、犠牲を考慮すれば魔王はそれは選択しないだろう。

そもその戦争の発端は異人種を迫害する王国側と、異人種を纏める魔王との対立にある。民族紛争である以上、最終的な決着は利害ではなく、どちらかの消滅か国交を断ち互いに無視をするしかない。

オウタは異人種に対し差別感情は無い。戦場において、人と異人種に大して差は無いとわかったからだ。

だが王は違った。王には異人種とは排除すべき獣としか見えていなかった。

故に、選択は排除しかなく、その度合いも加減は無い。

『勇者を召喚し、魔王を討つ。三百年前に使われた方法をもう一度試すのだ』

二月前、突如王はオウタにそう言った。

歴史書の記述によれば、確かに三百年前に勇者を召喚、外敵の撃退に成功したと記されている。

だが、もう一度それを繰り返すということは終わり方も同じということだ。

召喚された最初の勇者は、善良な男だったという。当時の王や民の声を聞き、戦うことを承諾、見事に勝利した。

そして、役目を終えた勇者は邪魔者として暗殺されたのだ。

オウタとしては、別に使い捨てにされた勇者に同情する気はない。だが今回の召喚で、前回と同じタイプの勇者が来るという保証は無かった。

何か犯罪者に近い人間が召喚されれば、強化された勇者の力はそのまま脅威になる。オウタはそれを危惧したが、王はそれを軽視していた。魔術には悪心を持たぬ者を召喚するよう設定されている事、前回の成功が根拠だった。

——王は召喚を甘く見すぎている。

王は良き意味でも悪い意味でも王族だった。責としての王権を振るうことを厭わず、決断を進める。そして王として末端や下々の事には認識が甘い。恐らくは可愛がられている娘もそれに輪をかけたものだろう。

それでも、今までは問題なかった。

この程度なら、近隣諸国の王族と比べても普通の認識だ。

——だが今回は、今回だけはどうにも胸騒ぎがする……

オウタは齡十六にて剣を持って王に仕え、以後二十年間、兵士として一線に身を置き功績を立て続けた剛の者である。その戦士として自らを生かし続けた直感と経験測が胸の奥で叫んでいた。——

——危機である、と。

駆け抜ける街道には、輝くような新緑が栄え、彼の予感とはまるで無縁な、突き抜けるような雲一つ無き青空があった。

余りにも汚れの無い何かに遭遇した時、人はいい知れぬ不安を抱く。透き通るほど純粋な存在に、心が耐えられないからだ。

オウタがこれから遭遇する存在は、純粹過ぎるが故に、人の理解を超えた怪物である。

そしてオウタは知るだろう、この世でもっとも恐ろしいものとは理解できぬ存在ではなく、理解されることを求めぬ存在だということ。

——な、んだ、これは……

郊外にある王城、到着したオウタ達が見たものは地獄の光景だった。

削られ、破壊された壁や床、儀式で撒かれる聖水のように散乱する血液と骨混じる肉塊。それが城で働いてうた人員の成れの果てだと理解するのに時間がかかった。

——何を、召喚した……ッッ！？

すぐさま部下に散開を指示、生存者の搜索に当たらせる。まずは王の生存を確認をしなければならない。どれほどに絶望的でも、王政が国の起点である以上、それだけはしなければ。

侵入した大広間で、オウタはそれを発見した。

王と来客が晚餐を取る巨大なテーブル、その中央に肉の芋虫が転がる。

両肘、両膝から先は無い。切断部には火傷後、恐らくは止血によりショック死を防ぐため。

全身には切り傷、致命傷を避けた、浅い傷跡。両の目は切り裂かれ、血と水晶体が見えた。

局部に突き立てられるは、精緻なる細工がされた燭台、侮辱と陵辱の証。

破壊が激しく、顔の判別はつかない。長い金髪は引きちぎられ、血に染まっていた。胴体から、女性であることはわかる。口元には数本の切断された指が押し込まれていた。明らかに男とわかる太い指には菱形の豪華な指輪が装着されている。

オウタには、その肉塊と指の持ち主、それぞれが即座に思い当たった。

——姫と、王の指……ッッ

かつて麗しい少女だった、その面影さえない肉塊の芋虫。その周りには血が撒き散らされ、薄い胸には短剣が突き立てられていた。この心臓を突いた短剣が、致命傷となった。

心臓を貫いて派手な出血が発生する。それはつまり、この拷問が終わるまで、姫は死ねなかったというおぞましい事実を意味する。

——これを、やったのか、勇者がッ！？

喉が震え、身が凍える。同時に脳裏に浮かぶ疑問——なぜ勇者がそれをする必要があるのだ？

王は少なくとも勇者を懐柔するつもりでいた。高圧的に接しようとは思わないはずだ。そもそも勇者はこの世界に対する知識が無い。最悪、王の思惑がバレたとしても、わけがわからない環境である以上、普通は逃げるか言うことを聞く。

ここまでする必要など、無い。

——召喚は悪心を持たぬものと設定されているはず、極端に凶暴な者や制御しがたい者は呼び出されない……はずだ。

自信が持てない。魔術設定構築理論はオウタには専門外である。ただ一つ言えることは、拷問を行った勇者らしき存在が、城にいる可能性がある。

すぐさま呼び笛を鳴らす。鳥声のような高い音が、残骸だらけの城中に反響。さ迷う生者達を呼びよせる。

——……来るか、勇者は？

勇者が来れば集合する部下で挟み撃ちが出来る。この場で倒す、最悪でも勇者の情報を持って帰らねばならない。

——勝てるか……？

剣において、国では自らと並ぶ者無しとオウタは自負している。十二名の部下もまた相応の手練れ。魔王に打ち勝つ勇者と言えど、多少は持つはず。

ピチャリ。

響く水音に、身が跳ねる。足音だ。

ピチャリ。

——部下ではないな

室内戦闘で、相手の所在がわからぬ内から移動音を出すなどという愚行を部下達がするわけが無い。ということは、生存者が勇者の二択。

ピチャリ。

——構わん。

確かめずに、斬ると決めた。迷う時間が惜しい。王の生存が絶望的な以上、誰が生きていようと同じことだ。

やがて、ロウソクで照らされる薄暗い廊下、死者と残骸が舞い散る道よりそれは姿を表した。

身長は高め、オウタと同じ程度。瘦身で穏やかな雰囲気の若い男だ。

面長で、柔和な顔は街にいるような平凡な若者にしか見えない。その全身を滴る血の赤に染め、王の生首を携えていなければ。

「……お前が、勇者か？」

問いかけに、男は応えない。王の首は驚愕と恐怖の表情に固まっていた。まぶたの肉がむしり取られ、二度と目を瞑れぬようにされている。その様は、死して後の安寧すら許されぬ。

そして、オウタは気づく。勇者が血に濡れている事、血が固まっ
ていないという事実。つまり、あの血は新しい。そして、右手に
持つ長剣は部下の物だ。

「十二人、いた。あなたの仲間か」

オウタは、部下が全て死んだ事を知った。

肉塊

「なぜ、人を殺すッ！　なぜ王や姫を拷問したッ！　答えろ、勇者ッ！」

喉を枯らして叫ぶ。叫ばずにはいられない。この異常に、耐えきれない。

「あなたの年齢はいくつですか？」

——……あ？

質問が成立しない。

「あなたの年齢は、いくつですか？」

繰り返される問い。答えるべきか否か。

「……三十六だ」

「偶数、ですか」

男の目が、オウタを見る。敵意が無い、邪気も無い、ただ何も感じさせない虚無の黒目。

「ならば答えます。ですが答えるためには僕についての事を話さねばなりません」

左手が下りる。王の首が落下、床に鈍い音を立てて転がる。口内

から転がる白くて細長い数本の何か。

「僕は、基本的に大抵の事は出来る人間でした。教えられた事はすぐに覚えられるし、勉強も特に苦もなくこなす、いわゆる優秀な方の部類な子供だったと思います」

男は、淡々と過去を口走る。だが彼の目に郷愁は見えない。以前変わらず、虚無しかない。

「だけど、ある時気づいたんです。僕は『これをやれ』と言われるば、それをする事ができますが、僕自身から『これをしたい』という欲求が湧かないのです」

左足が王の頭に乗った。

「昔僕を診察した医者が言うには、僕の脳には通常の人の脳と比べて器質的变化があるそうです。そのため自分からの欲求が制限されているのだと言われました。人に対する認識が極端に薄いのも、それが原因だそうです。——僕は人を背景の絵の様に感じるのですが、他の人はどのように思うのでしょうか？」

誰かにやれと言われれば、どんなことでも出来るのに、僕自身がやりたいと思うことが何も無いのです」

感情も無く、話し続ける勇者。しかし左足には確実に力がこもっていく。

「僕は悩みました。これでは僕は僕の意志ではなく、誰かの意志で動く人形ではないですか？」

僕の意志は、どこにあるのですか？」

自らの意志を外部に示すために行動を取らねばならないのなら、行

動を取れない僕は意志が無いということになる。

ならば、そう考えるこの僕の意志は一体なんなのか、行動の欲求が無くても、自己の意志を示すためにはどうすればいいのか、ずっと考えました。これが僕の持てた唯一にして最後の欲求です」

この男は、意志を持つてしまった虚無だ。何も無い、それでも意志を示そうとする、それ故に周り全てを吸い込む。

吸い込んでも、吸い込んでも、己という空洞を埋められない。空洞こそが、己自身なのだから。

「だから僕はこう考えました。『人の欲求を叶えることしかできないのなら、どう叶えるかで自分の意志を示す』と」

——…どう、叶えるか？

自らの欲求が無いなら、一体だれがこの地獄を勇者に求めたのか？

「人に頼られた時、それを叶えるか、あるいは逆を成すか、それを目の前の偶然性の二択に委ねる、そう決めました」

「——ッなッッ!？」

耳を疑う。この勇者は何を選択した？

「僕の元いた世界で、僕を頼る人全てにその方法を用いました。

石を投げ、それが右に落ちたので求められるまま人を助け、左に落ちたら無惨に殺す。

不意に見た時間が偶数だったら求められるまま人を救い、奇数だったら奈落へ突き落とす。

その場で偶然の二択を決め、それに従い希望を叶えるか真逆を成す。

それをし続けて、気がつけば法廷で死刑判決を受けていました。最も、その日の裁判官のネクタイが赤色だったので判決には従わないことにしましたが」

最悪だ。もはや犯罪者がどうのではない、最悪の相手を召喚してしまった。

たしかにこの男に悪心は無い。だがそれ以外の全てもない。

悪意も害意も殺意も無く、ただ決められた事として人を殺す、もはや怪物ですらない。

「あなたに全てを話すのも、別に話したいからとか目的があるからとかではなくて、年齢が奇数なら話さず殺す、偶数なら話すと決めていただけのことなんです。ただ、それだけなんですよ」

粘着質な音を立て、王の首が踏み碎かれる。散らばる脳髓、眼球、骨片、髪、白い指。

——……指？

見覚えのある細い指が、口の中に詰め込まれていた。さつきも床にこぼれていたのを見た。

——姫の……指か……ッ！

「僕が最初にこの王様に言われた事は、『我ら王家に忠誠を近い、民の希望と明日を護るため戦う、それが勇者だ』という内容でした。そして僕は『この世界の空に僅かでも雲が浮いていれば願いを聞く。雲一つ無く美しい晴天なら真逆を成す』そう決めました」

オウタは即座に理解した。なぜこの地獄を勇者が作ったのか。な

ぜ勇者が王族を拷問したのか。

今日の空は、余りにも透き通って、綺麗だった。
それ故に、この国は滅ぶ。

「そして空が美しかったから僕は僕のルールに従ったのです。

『民の希望と明日を護るため戦う』の逆として、国民である城の人間を勇者の力で全員殺しました。魔法による強化とは本当にすごいものですね、少々驚きましたよ。

『我ら王家に忠誠を』の逆として、王の前で姫を拷問しました。

姫の口には王の指を押し込み、向こう側で身につけた素人の医療知識で延命しながら切り刻み続けました。

王が舌を嚙もうとしたので、姫の指を口に押し込み、まぶたを千切って姫が拷問されて死ぬ様子を最後まで見てもらいました。

残酷で酷いこととは思いますが、決めたことなので最後までやり遂げようと思います」

何も無い、何も無い、何も無い、狂気も悪意も善意も憐憫も慈悲も自己愛も本能も、人として必要な全てが欠けた空洞が、それでもなお意志を示すため吠えている。

そしてこの国は、この吠え狂う虚無に滅ぼされるだろう。

「——最後までやり遂げる、とは？」

「城の外の全ての国民を皆殺しにします。あなたを含めてです」

——やはり、か。

すでもうこの地獄は、止められない。

不意に父母の顔が浮かぶ。オウタがここで死んだ後、やはり勇者に殺されるだろう。現実感の無い、しかし染み込むような絶望の中、

家庭を築いていなかったのは僅かに幸いだと思った。

すでにオウタには騎士の誇りは無い。王を守れず、そして今国が滅ぶ間際でそんな物は消えていた。

だがせめて、世界に対しての禍根は断ちたいと思った。

こんな他世界などから来たものに、国どころか世界ごと滅ぼされるのだけは我慢ならない。

それがこの世界で生きてきた、騎士ではなく一人の人間としてのオウタ・イセジンの意地だ。

「勇者よ、この国を滅ぼすことがすでに定められた事ならば、滅ぼした後、貴様はどうするんだ？」

「その後は……決めてはいないな、特に願うものもいなかったし」

その先はまだまつさらなままだ。ならば、いけるはずだ。

「なら俺の願いを聞いてみないか？」

「願い？ あなたの？ 悪いがあなたの死は決まっています。助けることはできませんよ」

「……そんな願いじゃないさ」

自殺させる選択肢も浮かぶが、魔法により強化されている以上、正直勇者がともに死ねる体なのかさえ怪しい。下手をすれば自殺しない可能性もあり、確実性に欠ける。

ならばこの男に全て押し付けてしまおう。何も無い空洞なら、この世界の歪みを、全て飲み込んでいけ、誰よりも純粹で呪われた勇者よ。

「本当の勇者になるのさ、あらゆる理不尽を正し、弱き者を救い、世界から悲劇を取り除く、国を救うんじゃない、この世界で生きる人々を救う真の勇者に」

遠い昔、子供の頃に憧れていた騎士の物語。そんなものは夢物語だと、気がつけば諦めていた。

そして、なぜか今度はその夢を自分を殺そうとしている勇者に押し付けている。

自分でもわけがわからない。だがなぜかそうせずにはいられなかった。

「抽象的、過ぎるな。……だが出来るだろう、しかし偶然性からの二択で逆が出れば」

「なら案がある」

オウタが懐から取り出したのは、一枚の古い銀貨。

「コイントスで決めるのさ」

銀貨が宙を舞う。複雑に多重円回転しながら、シンプルな起動で飛び、オウタの手へ落ちていく。

パンツと小気味よい音と共に、右手がコインを抑えた。

「お前が当てたら、逆でいい。外したらそのまま叶えろ」

この世界に来たばかりの勇者にとって、銀貨の表裏の正否などわかるわけがない。

「待ってください、どちらが裏でどちらが表なのか僕は……」

「表か、裏か」

だが、もし勇者が本質的に求めているものが『偶然性による選択』ではなく、『自らがやるべきことの具体的指針の材料』であるならば、公正な偶然性などただの飾りに過ぎない。

「僕は……」

「表か、裏かッ！ 答えろよ、勇者ッ！」

目の前にある自分の役割に、

「——表、だ」

喰らいつくただ、例えそれが死に至る毒であっても。

「……残念、裏だな。これでお前は国を滅ぼした後、本当の勇者をやってもらおうか？」

勇者は、すでに銀貨を確かめることさえしなかった。

「さあ、勇者。後の事が決まった以上、ちゃっちやと話を進めよう。もつとも、俺もただで終わらせる気はないがね」

抜刀、勇者へ構える。後の憂いが消えても、やはり生きることが諦める気にはなれなかった。

「いくぞ、虚^{こころ}の勇者よ！」

叫び、踏み込む。加速と同時に流れるように、剣を振るう。

その一撃は、オウタの生涯の中で、最高の斬撃だった。
だが勇者が無造作に剣を振った瞬間、神速の両腕が爆ぜる。剣が
舞い、天井へ突き刺さった。赤の肉片、白の骨片が咲いた。

——あ、あ……

美しいと、思った。ただ純粹なまでの暴虐の力そのものが、余り
にも美しかった。この力が国を滅ぼし、世界を救うだろう。

思考の刹那、放たれる勇者の刃がオウタの頭蓋を貫く。

オウタの意識は闇へ霧散し——彼の意識を構成する脳組織が
床にぶちまけられ、機能を終えた。

国が一つ消えたという。

王制、が消えたではなく。

領土、を失ったのではなく。

国を構成する全ての人がたった一人に殺されたという。

だが消えた国の領土は周辺の国に即座に分割統治され、わずかな
うちに混乱は収束していった。

どれほどの悲劇でも、世界は回り続ける。個人の悲しみや怒りな
ど、無視されるだけだ。

それ故に、世界の片隅に勇者が一人現れたことなどに気づくもの
はいなかった。

今は、まだ。

肉塊（後書き）

ぬるくない勇者を書いたつもりが、ただの異常者になってしまった
……

ちなみにオウタ・イセジンの名前の由来は

オウタ・イセジン↓オワタ・ジンセイ↓人生＼（＾Ｏ＾）ノオワタ
つまり名前から死亡フラグだったんだよッ！！（A A 略

ではお気軽に苦情と感想と指摘をどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7248z/>

その勇者、虚ろにつき

2011年12月24日01時46分発行